

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



サケの缶詰

アラスカ 1998年収集
高さ5.0cm、径8.6cm

北方民族博物館だより
一第34号一

ロビー展「ウイルタの手仕事」	2
平成10年度新収蔵資料紹介	4
事業報告：講座・講習会・博物館クラブ	5
第33回日本民族学会研究大会参加報告	6
お知らせ・第14回特別展案内	7
News	8

ウイルタの手仕事

会場：当館特別展示室

当館が開館して8年になります。この間展示活動や普及活動、調査・研究活動とともに資料収集活動をすすめ、数多くの資料を収集することができました。

これまでに当館の資料収集活動を紹介するものとして、新収蔵資料展Northern Collectionsを開催してきましたが、新たにロビー展として新収蔵にこだわらず、個別のテーマを設定したなかで資料収集活動の成果を紹介することとしました。

今回のロビー展では北海道、網走にもゆかりの深い、ウイルタの資料を『ウイルタの手仕事』のテーマのもと約60点ご覧いただきました。

本展示には北川アイ子氏、池上二良氏、資料館ジャッカ・ドフニからご協力いただきました。

ウイルタはサハリン（樺太）の少数民族です。日露戦争後のポーツマス条約（1905年）によって日本領となったサハリンの北緯50度以南に暮らしていたウイルタは、その多くが敷香（現ポロナイスク）郊外のオタスとよばれた場所に、アイヌ以外の他の少数民族とともに集められました。オタスには学校も建てられ、ウイルタ、ニブフの子どもたちは、日本の教科書を使って勉強をしました。また、オタスは観光地として有名になり、多数の日本人観光客が訪れる場所でもありました。

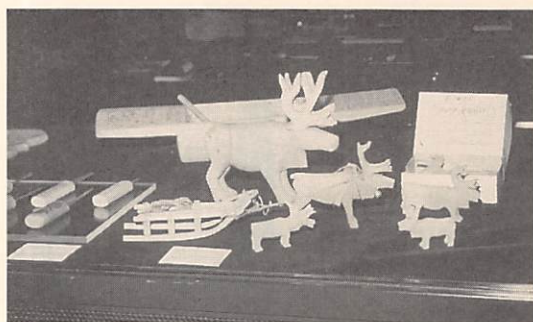


第二次世界大戦後、サハリンの旧日本領に住んでいたウイルタ、ニブフの人びとの中には、北海道や本州へ移住してきた人もいます。

当館が収蔵しているウイルタの資料は、戦前にオタスで収集されたもの、昭和30年代から40年代にかけて網走で収集されたものと（これらは網走市から寄贈されたものです）、最近収集したものがああります。最近収集したものには、女性用、男性用、乳児用などの衣服一揃いがあり、これまでの収蔵品にはなかった部分も補っています。

木工・彫刻は男性の仕事です。ナイフを使って生活に必要な道具をつくりました。木偶（ウイルタ語でセワ）は、本来はシャマンが、例えば病気治療をするためなどに作るものでしたが、網走に移住してきてからはおみやげ品としても作られるようになりました。

このコーナーには、トナカイの木彫り、木偶（ウイルタ語でセワ）、木製調理道具、トナカイの木彫りを作るときに使ったナイフなどを展示しました。



さまざまな木工・彫刻品

白樺樹皮細工は女性の仕事でした。白樺樹皮細工には、箱や水汲み桶があります。箱は裁縫道具入れなどとして使われました。

白樺の樹皮に水分がたくさんあって皮をはぎやすい、6月中旬頃から7月10日くらいの間に行われました。はいだ樹皮をあとから水につけて柔らかくして使うといったことはせず、はいだその場で急いで形を作ったそうです。そして後から仕上げをしました。白樺樹皮は木の根を使って綴じま

す。白樺樹皮細工の箱には、白樺樹皮を切った文様（うずまきが特徴的な文様、ウイльта語でイルガという）を、黒色布などをはさんでひき立つようにして貼り付けることができました。

ウイльтаの女性は衣服や靴、袋などの実用品にイルガを刺繍してきました。また、皿敷や敷皮とよばれるテーブルセンターや財布はウイльтаがもともと使っていたものではなく、おみやげ品として作られるようになったものです。トナカイのなめし皮に色とりどりの絹糸を使って刺繍が施されています。網走へ移住してきてからは布製のものが作られるようになりました。



白樺樹皮製品

ウイльтаの衣服

ウイльтаの衣服というと、写真左のような右開きのものがよく知られていますが、この形のもの（ウイльта語でポクト）はどちらかというと特別なときに着る「よそゆき」のようなものでした。他にボピラマ＝テトゥヤカウラクトゥといった名称の普段着があります。



ウイльтаの衣服

ウイльтаの住居模型

かつてウイльтаの人びとは、トナカイを飼い、野山を自由に移動しながら狩猟、漁撈、採集をする生活をおくり、樹皮ふきの家（ウイльта語でカウラ）やテント（ウイльта語でアウンダウ）で暮らしていました。

住居模型は実際の1/10の大きさと、オタスに移住する前の夏と冬の生活の様子をあらわしています。



ウイльтаの夏の住居の模型

ロビー展会場では刺繍、靴づくり、手袋づくりなどの手仕事のほか、サケを使った保存食の作り方や、踊りなどを紹介する映像を上映しました。これは1997年から1998年にかけて、1年間にわたり網走周辺で撮影した映像を編集したものです。

（学芸課 笹倉いる美）



展示室の様子

平成10年度収集資料紹介

平成10年度にはナーナイ等の実物資料87件とウイлта住居模型1件、ウイлта民族映像シリーズ1組ほか、映像資料計3件を収集しました。以下に実物資料の概要と主なものを紹介します。また数多くの資料の寄贈を受けています。寄贈資料30件については、そのつど本誌面に掲載してきましたのでご参照下さい。

実物資料の民族別の内訳は以下のとおりです。

ツァータン	3件
ナーナイ	65件
ウデハ	3件
ウイлта	14件
ツィムシャン	2件

計87件

平成10年度は、平成9年度にひきつづき、特にロシア・アムール流域の資料を充実させることができました。

収集したウイлтаの資料は、6月からのロビー展で早速紹介しました。またアムール流域の資料につきましては、第14回特別展『神の魚・サケー北方民族と日本』でその一部を展示する予定です。以下に平成10年度収集資料の一部を紹介します。

白樺樹皮製トナカイ乳入れ（ツァータン）

トナカイの搾乳をするときに使用する。白樺樹皮製でひもは羊の毛製。モンゴル・ツァガンノール村近くで収集。12.0cm。



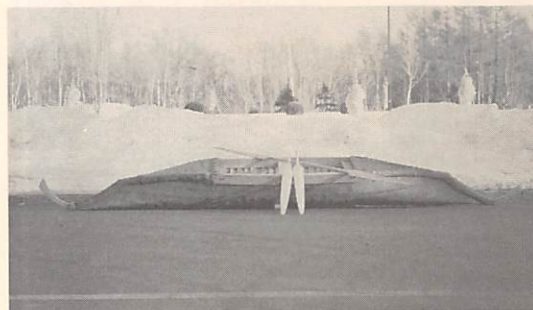
魚皮製帆（ナーナイ）

主にアチャン村などロシア・アムール地方で捕獲された魚の皮を使ってつくられたもの。188cm。



白樺樹皮製船（ナーナイ）

全長520cm。こぐときには、^{さお}竿、ダブルパドルのほか、短いヘラ状のかいを使う。



版画（シルクスクリン、ツィムシャン）

「ワタリガラスとカエル」ジャック・ハドソン 1997年作、56cm。



(学芸課 笹倉いる美)

講座「イヌとトナカイ —北方における家畜飼育文化—」

講師：中田篤（当館学芸員）

本講座では、北方地域の代表的な家畜であるイヌとトナカイを取り上げ、それぞれの役割やその共通点、相違点について紹介しました。以下でその要旨をお知らせします。



イヌはオオカミの家畜種である。家畜としての歴史がもっとも長く、世界各地で幅広い役割を果たしてきた。北方に特徴的な役割としては、犬ぞりの牽引が挙げられる。犬ぞりは北方地域では冬季間の重要な移動・運搬手段の一つであった。とくに海岸・大河川流域で海獣狩猟や漁撈をおこなってきた人びとは、そり犬として多くの頭数を飼育してきた。

一方トナカイは、寒冷地に適応したシカの一種である。小型でツンドラ地域に分布するツンドラ型と、大型で森林（タイガ）に分布する森林型に大別できる。家畜化は約3,000年前とされ、それぞれの型に野生種と家畜種があるが、家畜種はほとんどユーラシア大陸のみに分布している。

トナカイ飼育の方法も、トナカイの種類に応じて二つに分けられる。森林で陸獣狩猟をおこなってきた人びとは、トナカイの乳や肉を補助的に利用しながら少数のトナカイを飼育してきた。移動や運搬はトナカイの役割となり、イヌは猟犬として飼育された。

一方、ツンドラで大規模なトナカイ飼育をおこなってきた人びとは、トナカイの肉や毛皮に依存した生活をしてきた。移動・運搬はトナカイぞりでおこない、イヌには猟犬のほか、番犬やトナカイを駆り集める牧畜犬の役割を与えていた。

以上のように、地域の環境やおそらく歴史的背景によって、イヌとトナカイの役割は異なっている。イヌとトナカイが同時に飼育された地域では、両者は「移動・運搬」といった役割に関して競合したのではないだろうか。この場合、イヌの対応の柔軟性によって両者が共存してきたと思われる。（イラストは『世界大百科事典』第20巻、平凡社1988年より）

講習会 & 博物館クラブ

■講習会「北方民族の有用植物観察会」

日時：5月23日

講師：齋藤玲子（当館学芸員）

新緑の季節を迎えた博物館周辺の林で、有用植物の観察会を行いました。この時季、タラノキの芽（タランボ）やクサソテツ（コゴミ）など、お馴染みの山菜も博物館近くで見ることができます。

アイヌをはじめとする森林地帯に住む北方民族にとっても、春は食用にする若い葉や茎を採集するシーズンで、ギョウジャニンニクやニリンソウはその代表的なものです。また、デンプンを多く含むユリやランの球根は重要な食料となっていて、今回はサイハイランやオオウバユリの根を掘ってみたいところ、思っていたより食べ応えがありそうだ、と参加者たちは感心していました。食草だけではなく、アイヌの着物（アツシ）の素材となるオヒョウ（ニレ科）や食器や船などを造るのによく利用されるハリギリ（ウコギ科）等の樹木や、毒として用いられたトリカブトなども観察しました。

また、野外に出る前にビデオでデンプン採取やアツシ織りの様子を見たり、それぞれの植物のアイヌ語名称を知ることによって、生活との関わりを再確認することができたのではないかと考えています。

■講習会・博物館クラブ「とんぼ玉づくり」

日時：講習会6月11・13日、博物館クラブ12日

講師：笹倉いる美（当館学芸員）

とんぼ玉は、ガラス製の玉のことで、アイヌの首飾りやウイルタの腕飾りにみられるように、北方でも交易品として広く使われていました。毎回人気があるため、今年度は時間帯に変化をつけて3回行いましたが、定員はすぐにうまりました。暑いなかにもかかわらず、参加者は集中してとんぼ玉づくりを楽しまれたようです。



第33回日本民族学会研究大会

於：東京都立大学

標記の学会が、去る5月29・30日に開催されました。個人発表が120件、分科会が9件と、福岡市で行われた昨年度の大会に比べ3割ほど多い盛況な大会となりました。このうち、北方地域の民族に関する発表を中心に報告します（以下、敬称略）。

* * *

■「ブリヤート共和国にみえる民族文化と学校教育」東京大学・渡邊日良

ソ連時代に全体主義の下で抑圧されていたとされる民族文化は、新生ロシアでは多文化主義思想により「復興」してきている。教育省や教師主導で取り組まれているブリヤートの言語や芸術の学習、祖先をたどる「私の家系図」プログラムなどとおして、子どもたちは民族文化を学んでいる。

■「ロシア沿海地方ウデへの罽^カ猟に関する民族考古学的調査」東京大学・佐藤宏之

先史時代の社会構造や機能を解釈するために、現存する諸事例からモデルを構築する民族考古学的研究が重要である。縄文文化のような定住型狩猟採集システムを理解するために東北のマタギとウデへの狩猟具を中心に調査をしたところ、特に毛皮獣をとる罽は広範囲に存在した可能性があると考えられた。

■「異文化交流の場としてのスウェット・ロッジ—カナダ西岸サーニッチのスウェット・ロッジにおけるポリティクス」一橋大学・渥美一弥

北米内陸の先住民の間で伝統的に用いられてきたスウェット・ロッジ（蒸し風呂）は、文化復興運動にともない1970年代末に北西海岸インディアンのサーニッチにも取り入れられた。定期的にかかれるこの行事は、先住民としての自覚を喚起させるだけでなく、「大地への敬意」や「環境破壊への抗議」といったテーマに賛同するヨーロッパ系カナダ人との交流の場ともなっている。

■「現代カムチャツカ先住民社会における伝統生業の意味 トナカイ飼育とサケ漁」当館・渡部裕

ベレストロイカ以後、カムチャツカの先住民たちは大規模トナカイ飼育体制の維持が困難になるなど経済的な混乱に陥っている。一方、自家用食料の確保のためサケ漁は重要性を増してきている。

■「西シベリア・ツンドラ・ネネツの生業と生活」千葉大学・吉田睦

ツンドラ・ネネツは、トナカイ飼養を中心に自給経済への依存度を維持・強化することにより、外部との距離を保ち、社会変動の衝撃を少なくしてきた。しかし、毛皮需要の落ち込みや石油・天然ガス開発による遊牧地の荒廃なども心配され、ソ連型経済依存体制から抜け出せない状況のなか、彼らの前途も多難であることが予想される。

■「イヌイットの青年・中年と社会変化」国立民族学博物館・岸上伸啓

カナダ・ケベック州北部のアクリヴィク村では、狩猟者援助プログラムにより、獲物を村で買い上げ村人に無償で提供するなどの活動を行ってきた。ハンターがいない世帯にも伝統的な食物が分配されるなど効果をあげている一方で、若い世代の男性のなかに狩猟離れが起きていることも指摘しておく。

■分科会「アラスカ・チムシアンの新たな挑戦」

1887年カナダからアラスカに移住し、新しい村落「メトラカトラ」を形成した住民たちの、社会・経済的發展と伝統文化との関わりについて、昨夏の調査結果を中心に報告をした。それぞれの標題は「アラスカ・チムシアンと宣教師ダンカン」日本学術振興会・松林義行、「メトラカトラにおける開発と技術革新」北海学園大学／当館館長・岡田宏明、「観光と芸能・工芸品に関する活動—ネイティブ・ビレッジ・ツアーを中心に」当館・齋藤玲子、「南東アラスカにおける「伝統」の連続性・非連続性・再創造—メトラカトラとフナーの事例を中心にして」金沢学院大学・益子待也、「メトラカトラ開発の背後にあるもの」北海道東海大学・岡田淳子（代表者）。

* * *

このほか、当館の対象とする地域・民族に関する発表として「北米北西海岸インディアン、沿岸セイリッシュ集団の考古学資料と初期の民族誌記述」早稲田大学大学院・熊崎保、「カナダ先住民の現代の結婚例—北西カナダ先住民、ウェツウエツン族の例、1997年」関西外国語大学・齋藤和枝、がありました。（学芸課・齋藤玲子）

第14回特別展

「神の魚・サケ
—北方民族と日本—」

開催期間:平成11年7月20日(祝・火)

- 9月26日(日)

会場:当館特別展示室

観覧料:一般250(200)円、高校生・大学生80(50)円
小・中学生50(30)円

*()内は10名以上の団体の場合

北太平洋に生息するサケ類は沿岸に生活する人びとの生活を潤してきました。本特別展は北方諸民族や日本列島におけるサケ類の利用文化とその歴史をたどり、サケ類と人とのかかわりの在り方について展示します。

北方諸民族は河川に遡上するサケ類を乾燥・保存し重要な越冬食料としてきました。また、サケ類の皮は丈夫で、布類やバッグ類、防水シート、船の帆など、地域によって多様な生活用品が作られてきました。サケ類が比較的多く遡上する北部本州でもサケ類の利用文化が今日に伝えられています。そして、人びとはこのような多くの恵みをあたえてくれるサケ類の豊漁を願い、サケやそれを支配する自然の〈神〉との緊密な関係を保つことに配慮してきました。漁具や儀礼具、魚皮製品やさまざまなサケの加工方法の展示を通じて北方諸民族や本州北部の伝統的サケ文化を紹介するとともに、昨年度の調査に基づきカムチャツカ先住民の現代におけるサケ利用文化についても紹介します。

日本列島では交易用に捕獲するサケ漁の歴史は古く、今日まで続く塩サケの加工は江戸時代までさかのぼります。北アメリカ西海岸では19世紀半ばにサケ類の缶詰生産を目的に商業捕獲が拡大してきました。さらに明治30年代から日本人漁業者によるロシア沿岸の北洋漁業では塩サケと缶詰生産が行われていました。写真資料や実物資料の展示からサケ類の商業捕獲の歴史、近現代におけるサケ類の利用の在り方を紹介します。

このほか、9月4日(土)には村上市内水面漁業資料館の岡村博氏ほかを講師に講演会「サケをめぐる文化」を開催します。三面川に代表される本州日本海側のサケ利用文化や北方諸民族のサケ漁やサケ利用の在り方を3名の講師が紹介します。

今号の表紙 —サケの缶詰—

これらのサケ(スモーク・サーモン)の缶詰は、アラスカ・ツィムシヤンの村メトラカトラが経営するアネット島水産加工場で作られた。1918年に缶詰工場として設立されたが、現在はサケ、イクラ、ウニやナマコなどの冷凍加工が主体となっている。

缶詰のラベルはいずれもメトラカトラのアーティストがデザインしたもので、左下は日本でトーチムボール彫刻の実演をしたことがあるというジャック・ハドソン氏の「Salmon Feast(サケのごちそう)」と題された版画である。あとの2つはウェイン・ヒューソン氏によるもので、上は「Salmon Moon(サケ・月)」、右下は「Four Clan(4つのクラン)」と題され、ツィムシヤンの親族組織と関係が深いとされるワシ、ワタリガラス、オオカミ、シャチが描かれている。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 5/5 アイヌが守ったオオウバユリの貴重さ伝えたい：市民グループが屯田防風林で保護訴え「祭り」、札幌市/M
- 5/7 アイヌ民族とサハリン先住民が水産物の取引開始へ：受け入れ団体設立に向けた準備会を開く、札幌市/D
- 5/8 アイヌ語教室・織布講座開講：苫小牧駒沢大学で受講生を募集、苫小牧市/AS
- 5/18 縄文集落の規模確認へ：青森県三内丸山遺跡に匹敵する規模の大船C遺跡の今年度調査が始まる、南茅部町/Y
- 5/22 縄文中期、特徴は余市式土器の大谷地貝塚：「国史跡」に向け、文化財保護審議会の答申に盛り込まれる/Y
- 5/29 米のスミソニアン博物館で開催中の「アイヌ特別展」に参加した女性が報告会、札幌市/D
- 5/31 少数民族ニブヒの文化伝承者キム・ユンシンさん死去、サハリン/Y
- 6/1 縄文時代を丸ごと再現：実際の貝がらを使って北黄金貝塚復元、伊達市/Y
- 6/4 地鎮山のストーンサークル、新たに9基を確認：縄文後期に形成か？形状多様、広く分布、小樽市/D
- 6/12 網走刑務所旧二見ヶ岡農場の建物群を移築：百年余りに建てられた歴史的建造物、博物館「網走監獄」へ払い下げ、網走市/AB

*AB：網走新聞、AS：朝日新聞、D：北海道新聞、M：毎日新聞 Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は抜いた大きい方を紹介しています。

■寄贈資料紹介

- ・衣服：東京都の福田龍介氏からイヌイトのフード付アザラシ毛皮製衣服1点が寄贈されました。
- ・ポーチほか：神戸市の藤代節氏から西シベリア・ドルガンの毛皮製ポーチ1点とキツネ毛皮1点が寄贈されました。

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等

- ・NHK「街道をゆく」プロジェクト1999『司馬遼太郎の風景⑦NHKスペシャル・オホーツク街道／十津川街道』

■主な来館者

- 5/8 中華人民共和国・
ハルビン工程大学より5名
- 5/19 マケドニア旧ユーゴスラビア共和国・音楽グループ「シンテシス」
ドラガン・ダウトフスキ団長
ほか17名
- 6/14 サハリン日本協会代表团
ゾートフ・ニコライ・
ミハイロビッチ氏
グリコ・レオニード・
アナエトリッチ氏
ほか5名

■北海道立社会教育施設紹介写真パネル展

6月14・15日北海道庁1階道民ホールで北海道教育委員会主催の北海道立社会教育施設紹介写真パネル展が開催されました。当館でも常設展示室やさまざまな活動の様子を写した写真のほか、北方民族の分布地図などを展示しました。また、来場者の方々が当館出版物を手にとって見る事ができるコーナーを設けました。期間中、

700名を超えるたくさんの来場者がありました。



パネル展の様子

■その他の行事報告

5/3 こども映写室

■観覧者動向(4～6月)

常設展示	(名)
4月	1,330
5月	2,194
6月	3,741
計	7,265

■行事案内(7～10月)

- 7/20(火・祝)～9/26(日)
第14回特別展「神の魚・サケ
ー北方民族と日本ー」
- 9/4(土) 講演会「サケをめぐる文化」
- 9/11(土) 博物館クラブ
「ぬり絵で作るイヌイトの
着せ替え人形」
- 9/12(日)
連続講座・北方文化セミナー①
「民族考古学と漁撈ー
北海道、そしてアラスカへー」
- 9/16(木) 北方文化セミナー②
「魚を捕るーアイヌとカムチャツ
カ先住民の漁法を比較してー」
- 9/30(木) 北方文化セミナー③
「シベ(本当の食べ物)
ー主食としての魚ー」
- 10/7(木) 北方文化セミナー④

「川の民の美しい文様

ー衣服や道具にこめた意味ー」

10/14(木) 北方文化セミナー⑤

「魚をめぐる精神文化

ー豊漁を祈る心ー」

10/21(木) 北方文化セミナー⑥

「魚の利用・価値あれこれ

ー食べる・着る・肥やすー」

10/28(木)・29(金)

第14回北方民族文化シンポジウム

「北方諸民族のなかのアイヌ文化

ー生業をめぐるー」

* 北方文化セミナーは1回目の9/12のみ14:00～15:30、2回目以降は19:00～20:30です。

■職員の異動

退職(6/30付) 学芸員 稲垣はるな
解説員 星 紫
採用(7/1付) 解説員 本川 知夏

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会平成11年度会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」とおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円。すでに会員になられた方は、お知り合いにもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■編集後記

博物館のまわりの林もすっかり緑に変わりました。この時期のオホーツク海沿岸はからりと晴れて暑い日も多く、日本で一番最高気温が高いこともあります。例年よりは少し遅いようですが、小清水や常呂町のワッカなど、網走周辺の原生花園でも花々が咲き乱れる季節になりました。(稲垣)